

仙台教区報

カトリック仙台司教区本部事務局
〒980
仙台市青葉区本町1丁目2番12号
☎ 022(222) 7371
FAX 022(222) 7378
編集・発行 板垣 勤

日本カトリック司教協議会は、教皇が全世界の教会に大聖年を迎える準備をするよう呼びかけたことに応えて、大聖年準備特別委員会を設置しました。同委員会では9月に、大聖年の理解を深めるため、また日本の教会が今後の動きをどのように考えるかを示す呼びかけ文を発表しました。

仙台教区でも司牧評議会のもと、教区大聖年準備委員会を10月31日に発足させて準備に取り組み始めました。委員会では、準備のために信徒が積極的に関わることを期待しています。

紀元二〇〇〇年を迎えるにあたって

— 日本のカトリック教会の皆さんへ —

はじめに

キリストにおいて兄弟姉妹である皆さん
教皇ヨハネ・パウロ二世は、一九九四年十一月十日、使徒的書簡『紀元二〇〇〇年の到来』を発表しました。イエス・キリストの誕生以後の時の流れを大きく千年毎に捉え、特に私たちが生きてきた第二の千年期の様々なできごとと、その時々々の教会の姿勢を振り返り、反省・回心・祈りと学びによって、喜びと希望に満ちた新たな千年期を迎える準備をするように、教皇はこの使

徒的書簡を通して世界中の全信者に向けて熱心に呼びかけておられます。

イエス・キリスト誕生二〇〇〇年

教皇は特にキリストのご誕生から二〇〇〇年のこの年を「大聖年」とすると宣言しています。「聖年」についての説明はここでは省きますが、旧約聖書に、喜びと解放の年として示されているこの特別な恵みの年が、現在の私たちにとってどのような意味をもっているのかを黙想することは有意



義なことでしょう。

教皇はこの紀元二〇〇〇年の準備にあたって、特に、悔い改めと和解の大切さを挙げ、いくつかの反省点を示しています。教会が、この千年間に教会の中で起こったことをはっきり意識すること、特に、教会が過去の誤りや不信仰、一貫性のなさ、必要な行動を起こすときの緩慢さなどを悔い改めることを勧められます。殊に、次の千年期に、同じキリスト者の間の分裂を克服し、完全な一致に向けて努力することが求められています。また、不寛容な態度、暴力の行使の黙認、不正や差別に対する多くのキリスト者の姿勢なども、過去の教会の反省すべき点として挙げられています。

教皇は、また、第二バチカン公会議がカトリック教会を他教派のキリスト者、他宗教の信奉者、現代のすべての人々に開いたことに言及し、紀元二〇〇〇年を迎える準備の過程で他教派のキリスト者や諸宗教の方々と積極的に対話し、この節目である年とともに喜びと解放の年とすることができるよう切望しておられます。

このように、世界の一人でも多くの人々が紀元二〇〇〇年を新たな千年期の始まりとしているいろいろな面からみため、続く世紀が希望に満ちたものとなるためによりよく準備していくことが求められています。このような取り組みは、教会に属するすべての人が、それぞれの身近な場で心掛け、

実践していくことが大切です。

日本の教会のイエス・キリスト 生誕二〇〇〇年に向けての基本的姿勢

1 学びと黙想

日本の司教団は、まずこの教皇の意図を十分に受け止め、それに熱心に応えていくことを、日本の教会の皆さんに勧めます。

それはとりもなおさず教皇の望みを十分に理解することにあります。そのためにはまず使徒的書簡『紀元二〇〇〇年の到来』（カトリック中央協議会発行）（または、その要旨を説明した『紀元二〇〇〇年をめざして』（大聖年準備特別委員会編集）を読むことをお勧めします。

紀元二〇〇〇年を迎える直前の準備については、一九九七年から各年毎にイエス・キリスト（一九九七年）、聖霊（一九九八年）、父である神（一九九九年）をそれぞれ中心として、三位一体の神が私たちにもたらした救いの恵みについて深く黙想するように呼びかけられています。

また、第二バチカン公会議の教えをあらためて学び、深く理解し、できる限り実生活に活かしていくことも大切な課題です。

この重要な公会議後、日本の教会もこの十年の間に二回の福音宣教推進全国会議を開催し、開かれた教会づくりをめざして歩んできました。ともに喜びをもって生きる

ことによって福音のあかしをしようと、それぞれ場で、話し合い、分かち合い、祈り合い、実践することに努めています。私たち一人一人が、毎日の生活の中で育てられる信仰の力によって、自分たちの周囲の社会の中で起こるさまざまなことがらに関わり、社会とともに歩んでいくことも、キリスト生誕二〇〇〇年を迎える大切な準備の一つと言えるでしょう。

2 希望と解放の時

この準備の期間を有意義なものとするために、まず第一段階として、過去の時間の中での歩みについてのより深い反省・回心・祈りと学びが求められています。なぜなら、現在と未来への道は過去の積み重ねなしに存在することはないからです。

しかし、この準備の期間にいつも見つめていなければならないより大切なことは、未来への希望です。その希望は、次に来る千年期を不正や差別、殺戮や戦争、飢えや貧困、虐待や暴力、いじめや殺人、環境破壊などのない、人間一人一人と神が創造されたすべてのものが大切にされる希望と解放の時とすることにあります。喜びと平和に満ち、希望で一杯の新しい世紀を迎えるために、日本の教会でも、みなさん一人一人が、小教区共同体の中で、日々の生活の中で、よりよい準備に積極的に取り組むことが期待されます。

3 記念行事を通して

これから紀元二〇〇〇年に向けての準備の間に、日本の教会には特に記念すべき二つのことがあります。

一つは一九九七年の日本二十六聖人殉教四百年、もう一つは一九九九年の聖フランシスコ・ザビエル渡来四五〇年です。特にザビエル渡来四五〇年は、日本の教会の福音宣教の歩みを振り返る絶好の機会となります。その歴史の反省を踏まえて、次の千年期への積極的関わりを模索していくことは、教皇の意向に沿った、私たちの具体的な取り組みとなるでしょう。

4 取り組みの実施

このような紀元二〇〇〇年に向けての歩みは皆さん一人一人の参加が不可欠です。そのために、行事など何らかの企画が必要ならば、できる限り皆さん一人一人の実生活の場である教区、小教区単位での実施が相応しいと考えます。

そのような身近なところから準備を進める歩みによって、キリスト生誕二〇〇〇年が日本の教会の全信者のものとなることを期待しています。

そして、全国的な祝典（記念のミサ等）も、このような、取り組みの基本的姿勢にそって行われることが望ましいと考えています。



5 司教協議会

大聖年準備特別委員会の役割

司教協議会としては大聖年準備特別委員会を設置していますが、この委員会の役割は、司教協議会が示した日本の教会としてキリスト生誕二〇〇〇年のあり方を受けてその姿勢を啓発・推進し、必要な事項に対処していくことにあります。そのために、主に、教皇庁からの大聖年に関する情報・資料等を各教区に伝達し、また、各教区・小教区で何らかの企画のために要請があれば、適宜必要資料の提供等のお手伝いをいたします。

また、当特別委員会では、今後の皆さんの準備の助けになるようにと考え、これから紀元二〇〇〇年までの期間、教皇が定められた各年のテーマ等について、日本の教会としてはどのような視点から深めていくかを具体的にまとめ、適宜発表することを予定しています。

おわりに

このように、教皇の意向を全面的に受け止めながら、日本の教会としてイエス・キリスト生誕二〇〇〇年を喜び、希望、解放の年として迎えるために、どのような準備をしていけばよいのか、今後も皆さんの祈りと協力を得ながら、歩みを進めていきたいと思えます。

これからの準備を通して、恵み豊かなキ

リスト生誕二〇〇〇年を迎え、日本の社会において私たち一人一人がイエス・キリストがもたらした福音をあかしする者となり日本の教会が絶えず「宣教する教会」に成長しますように、聖霊の豊かな導きを祈り求めましょう。

一九九六年九月十四日

十字架の称賛の祝日に

日本カトリック司教協議会
大聖年準備特別委員会

おめでとう



小林司教、米寿を祝う

米川教会と米川聖マリア保育園は、神戸から前仙台教区長・小林有方司教を米川に迎えて米寿(六六歳)を祝った。10月10日の祝う会には、及川東和町長や教会関係者が多数出席した。

司祭叙階二十五周年

佐藤守也神父(一関教会)は9月15日に司祭叙階二十五周年を迎えた。一関教会では銀祝を祝う会を開き、あわせて一関・千厩・水沢の三教会を司牧している佐藤神父の日頃の労をねぎらった。

96年 世界食糧デー

仙台市で10月28日に「第二回世界食糧デー仙台大会」が開かれた。大会プログラムは、講演「世界食糧サミットが問うもの」映画「翔べアランダスの子よ」の上映、ウガンダから現地報告、高校生の作文発表と食糧サミットへの派遣式等、多彩であった。この大会は日本人が、世界の食糧問題の実情を知り、地球家族として共に生きるために何が出来るか、何が必要とされているかを共に考え合う集いである。

エキキュメニカルな集いの大会実行委員会では、貧困と飢餓を解決するための募金に協力を呼びかけている。今年の募金はアジア・アフリカ、中南米諸国の学校教育の充実のために使われる。

● 献金の送金先(12月まで)
郵便振替 02290123809

「世界食糧デー仙台大会」



案内

大会共同主催の日本国際飢餓対策機構は教会、学校などにビデオテープ、映画フィルム貸し出し、パンフレット配布、講演に協力をしています。

◎ 問い合わせ、申し込みは
東京事務所まで

164 東京都中野区本町5-10-15

03-3363-7011 Fax 03-3363-8771

司牧評議会議案 定例△云議 報 告 出



9月の定例会議は三つの話題を取り上げた。以下に要点を報告する。

一、基金設立検討委員会の答申を受けて 教区内の意見集約を決定

基金設立検討委員会(旧称・教会共済基金検討委員会)は、95年3月の司牧評議会に提示された「教会施設整備共済基金(仮称)」。基本構想の是非と、その具体化の方策を検討していたが、司牧評議会に7月6日付けて答申を出した。定例会議では、この答申の説明を聞いてから、今後の取り組みを話し合った。

答申は、第一に、教区のかねてからの課題である教会施設の改修等に関わる教区内の協力的体制を確立することは、現時点では実効性に無理が多く、時期尚早であると判断している。

第二に、教区の緊急かつ重要な課題であるので、「共済基金」構想に代わる「共済支援(相互協力)制度」案を提示した。これは、主として小規模の教会の改修に限定した施設整備への援助を目的とする共済支援(相互協力)制度である。この制度は、各教会分担金と教区本部拠出金を原資として一九九八年度の創設を目指す。

第三に、今後の課題として、各教会が留

保する特定預金等の預託について「任意預託制度」の設立を検討するように提示している。

答申の具体化に向けた今後の取り組みについて決まったこと。

①教区内で提案を理解し合意を形成するため今年12月頃までに各県連絡協議会を開く。これにより教区民の答申への意見等を集約する。

②大方の合意が得られたと判断される時点(早ければ来年3月)で、制度創設に向けた「発足委員会」設置を司牧評議会定例会議に諮る。

③制度運営に必要な要項等は「発足委員会」が準備、検討し最終的に一九九八年三月の司牧評議会定例会議で審議、決定する。

④「共済支援(相互協力)制度」の発足は一九九八年度を目指す。

二、司祭大会宣言文の具体化に向けて

信徒評議員から宣言文が出されたことで司祭が積極的に動くことを期待した、司祭も信徒も「共同宣教司牧」の理解が不足しているなどの発言があった。その後の話し合いで、宣言文の具体化は長期に渡るもので、教区全体を見ながら評価、反省する必要があるとして、この話題は司牧評議会でき引き続き取り扱うことが確認された。

三、大聖年への取り組みについて

教区でも教皇の使徒的書簡「紀元二〇〇〇年の到来」の呼びかけを受けて、大聖年を迎える準備を始める必要があると、役員から説明された。その後、人権福祉委員会が提言した教区の準備案の説明を聞いてから話し合った。

その結果、教区内には大聖年を迎える準備がほとんど進んでいない状況が明らかになった。このことから、教区が大聖年を迎える準備をするためには役員会が動く必要があると確認されて、役員会が教区内に準備委員会を設置するなどの動きを作ることが決まった。この動きについては、来年3月の司牧評議会定例会議に報告する。

夏期合同キャンプ

仙塩地区教会学校教師会が主催した小学生夏期合同キャンプが、国立南蔵王青少年野営場で行なわれた。このキャンプは仙塩地区8教会初めての合同企画として行なわれた。

「大自然の中でアミーゴ(友達)」としたキャンプには、小学生、スタッフなど約百二十名が参加して盛り上がりを見せた。子供たちに多くの思い出を残したキャンプは無事終了した。



●第二回東北地区

宗教・倫理教育ワークショップ



仙台白百合学園で9月12日、13日に仙台・新潟・横浜各教区のカトリック11校から25人の教師が参加してワークショップが開かれた。この集いの特色は、参加者が教室に見立てた会場で、先生あるいは生徒になって模擬授業を行なうことにある。また、グループ毎の教案作りは、貴重な情報交換の場として参加者に喜ばれている。

主催者は、福音宣教を「種蒔き」とするならば、このワークショップは「種を分け合う」作業であり、教師が日頃おこなっている授業に、自分なりに自分に合ったやり方で「キリストの何か」を生徒や児童に伝えることを目指すものと話している。

☆参加者の声

- ・久しぶりに生徒の立場になるのも良い経験でした。生徒は先生から、いろいろなことを受け取るのだと感じた。
- ・集まりに参加して、自分の授業に足りないものがあることがわかった。
- ・模擬授業を見て、教師の信仰や生き方が出てくることを感じた。

●カトリック教育シンポジウム

仙台市の聖ドミニコ学院で、10月26日、27日にカトリック教育のあり方を見直し、魅力ある宗教教育の確立を考えるカトリック教育シンポジウムが開かれた。

今回は全国から約三百人の教育関係者が集まり、「これでいいのか、宗教教育」をテーマにして学びあった。

基調講演では、清泉女子大学教授・今道友信さんが「現代と宗教―二十一世紀に向けて」と題して、今までの教育の歴史を概括し、将来に目を向けることの大切さを話した。パネルディスカッションは田中賢一（郡山ザベリオ学院教諭）さんの司会で3人のパネラーが日頃考えていることを率直に話し、参加者の共感を得ていた。

●学院創立五十周年

福島市の桜の聖母学院は、11月1日に創立五十周年の記念式典を行なった。学院史には、学院の創立は昭和21年となっているが、昭和13年から16年まで幼稚園を開設した前史がある。

現在は幼稚園から短期大学まで二千人を越す大所帯となって、地域の教育に貢献している。

●修道会来日六十周年



教育事業に力を注ぐ聖ウルスラ修道会は9月15、16日に、来日六十周年を記念する集会を開いた。総長ノエラ・ゴドロ、海外から4人の管区長、アソシエ会員など百余名の参加者は、修道会総会の決定に沿って個々に福音の新しい道を開くことを目指して生きることが大切であると再確認した。

●教会・幼稚園新築

野辺地教会と、同カトリック幼稚園が4月から始めていた新築工事が、11月末にほぼ完了した。両施設一体となった建物の落成式は来年3月を予定している。

訃報



深沢 豊治神父

脳梗塞により10月23日に光ヶ丘スベルマン病院で帰天。享年82歳。

40年にローマで司祭に叙階され、その後、戦時中に軍隊に召集される。函館地区が52年に仙台教区から札幌教区へ移管するなど教区が激動する時期に宣教司牧に携わった。主な司牧地は函館元町、会津若松、畳屋丁、元寺小路、亘理、大籠塩釜、石巻の教会。94年の引退までの25年間は石巻教会と幼稚園に関わった。晩年は膀胱癌により約2年半の闘病生活を送った。

ラローズ・ベノア神父(ドミニコ会)

カナダで10月22日に帰天。享年92歳。32年に来日後、おもに仙台教区の会津若松、大河原、松木町、郡山、湯本の各教会を司牧した。日本での宣教司牧は57年間に及んだ。今年、カナダで司祭叙階65年を祝い、訪日したばかりであった。

JYD (ジャパン・ユースデー)

参加者の声



埼玉県の国立婦人教育会館を会場に、JYDが9月12日から5日間、開催された。大会テーマは「EGYPT COEGITHER 神の国はあなたがたの間にある」。

初めてのJYDは、事務局が全国の青年に、「まずは集まろう、知り合おう、一語にやってみよう」と参加の呼びかけをして開かれた。これに応えて、カトリックやプロテスタントの人、外国籍の人、障害者など全国から四百人以上の青年が集まった。

JYDの目的は、①青年の出会いと交流を深め、②「福音的共生への奉仕」という共通感性によるネットワーク作り、③青年の力で教会を活性化させることである。

基調講演では神田神父(鷹取教会)の阪神淡路大震災の時に体験した「神の国」の話聞き、青年たちは目に見えないもの、日頃見えないもの大切さを再認識させられた。JYDをユニークなものにした各種のクラブ活動は盛り上がりを見せた。また、ミサを中心に「祈り」の時を大切にしたい企画は参加者から喜ばれた。

(「福音宣教」8, 9月合併号参照)

仙台教区からは、仙台地区の8人の青年と1人のシスターがJYDに参加した。参加者の声を以下にお届けする。

「JYD報告書」

池内 千草 (北仙台教会)

私は14日から16日までの後半3日間JYDに参加してきました。JYDの印象を一言で言うならば「熱い三日間であった」となると思います。しかもその熱さは激しく燃え上がり、燃え尽きるというよりも、フツフツとした、静かな中にも力強さを感じるものであったように思います。そしてこのような雰囲気の中で、私たち参加者全員しっかり燃えて帰ってきました。

この熱さを感じる場面は、クラブ活動などの毎日のプログラムの中で何度もあったのですが、中でもミサや交流会のような全員が一同に会する場所で強く表われていたと思います。私は特に交流会でフィリピンのシスターと、そのシスターが中心になっているボランティアグループの若者たちとじっくり話したことが強く印象に残っています。そのグループにはフィリピン人だけでなく、夏休み中のボランティアに来ているイタリア人の学生や、日本人のボランティアなども含まれておりました。彼らは教会を通して食事や医療のため、また幼稚園や小学校などで手伝っているということでした。イタリア人のシルヴィアさんに、フィリピンの印象を聞いたとき「イタリアや日本は物質的にフィリピンよりずっと豊かだけれど、フィリピンの人のほうが表情や

心がずっと豊かなような気がする」と話しその一言がずっとしりと心に残りました。二日目の徹夜祭ではバンド演奏などが行なわれました。その一つとして出演したドン・ボスコのグループの自作自演のフィリピン・ソングと、海外でのボランティア活動の報告は決して上手ではなかったのですが、それだけに熱い思いがびんびんと伝わってきて、「何かしたい」という私たちの共通の潜在的な思いを大いに刺激してくれたように思います。

JYDから一か月たち今やっとなら一人ひとりの中で、あのとときの経験が何だったのか消化されつつあるように思います。その思いや表現の仕方は各自違いますが、ただ一つ共通に感じていることはJYDはとても「いい動機づけの場」、「いいスタート地点」だったということです。参加した時仙台からの参加者は、お互いのことをよく知らない寄せ集まり集団だったので、JYDの経験を通して、教会を超えたところでの深い繋がりができ、そしてこの繋がりが今、仙台の教会の若者へと広がってきています。私たちの「何かをしたい」という思いが、例えばバンドの活動や、十二月の初めに予定している黙想会として少しずつ形になってきているところです。私は自分たちの出来ることから、少しずつでもこのような活動が広がっていくと良いなあと考えています。「これから何かが始

まるのではないか」そんな期待を感じさせながら96年のJYDの大会は終了したように思います。

「JYD所感」

淀川 薫（一本杉教会）



仙台教区でのJYDの認知度はどれくらいだったのだろうか。JYDと聞いて「ジャパン・ユース・デー」のことだとすぐ判る方は、余程青年たちの動向に注目してくださっている方に違いない。そう思う程、仙台教区からの参加者は少なかった。かく言う私も某神父さんから声をかけられて参加した一人だが、プログラム半ばにして、何故もっと多くの人が東北から参加しなかったのだろうか、もったいない！と思うに至った。

宗教がネガティブなイメージで捉えられている日本社会の中で、教会でもいろいろな青年の姿がある。社会生活とキリスト教的価値観の融合に困難を感じ教会に行く意味を見出せないでいる人、教会に自分の居場所を見付けて着実に歩みを進めている人、既存の教会組織に満足を感じられず離れていく人、青少年の育成を掲げている教会の前にして何をしたらよいのか解からないでいる多くの人、などなど。

JYDに参加して自分にとってプラスに

なったことは、数百人のカトリック青年の集まりを目にして、それまで抱いていた日本のカトリックへの多少の諦めが入り交じったシニカルな気持ちが払拭されたこと、他教区の様子を知ること自分たちの足元を見直す視点が得られたことだろう。

JYDではいろいろな出逢いがあった。世界に目を向け手を取り合っていこうとしているグループ、困難な社会問題に果敢に取り組んでいるグループ、音楽やスポーツなどに集まっているグループなど一見統一性のないような若者たちが、生き生きとしたミサでまさに一致したのである。これは期待が少なかつた分、私の目にはとても新鮮に映った。

さて、仙台市の五教会の青年が集まり仙台中央地区青年会が発足して一年半が過ぎた。当初の目的であった人を集めることは限界に達しつつあると同時に、初期に危惧された明確な目的の欠如がそろそろ私たちに変革を促している。青年の集まりであるだけにメンバーの入れ代りも進む。このような時にJYDに参加できたことに本当に感謝している。

沢山のことを聞き放し、受け放しで自分の中だけに留めておくつもりはないどころか留めてはおられず、何かの形でこの体験を仙台のユース活動に還元したいと思う。東北限定JYDの開催を提言するもよし、楽器を持ち寄って積極的にミサに参加

するのもよし、社会の問題に敏感であろうとするのもよし、直ぐにでも行動に移せることは沢山あり、いろいろな可能性があることを多くの人たちと話し合う機会を持ちたいと思う。

JYDのような企画は一人では希望や不満を発言する場所すら見つけられないでいた若者たちに、自分たちの可能性と教会に失望することはないと気付かせるという大きな役割があった。JYDが一時の高揚だけで終わらない運動となるように希望している。



垂青録(安来内)

「人間が好きさ」

人間を信じ、未来を信じて生きる
アマゾン先住民からの伝言。

10月に出版されたこの本は、アマゾン先住民が、祖先(過去)から子孫(未来)につらなる大きな川の流れに、ゆったりと身をまかせ、地球をいためることなく、鳥のように静かに通り過ぎていく生き方を通して、日本の子供たち大切なことを伝えようとしている。

写真と文 長倉洋海

福音館書店 定価二六七八円

「仙台ダルク」開設される



世界中で広がる薬物汚染が日本でも大きな社会問題となつてきている。このような時、茨城ダルクの要請により7月15日に、東北ではじめての薬物依存者のための民間リハビリ施設「仙台ダルク」が開設された。

仙台ダルクは仙台教区が施設を貸し出し、全国で9番目のダルクとして発足した。ダルクの正式名は「ドラック・アディクション・リハビリテーション・センター」である。日本のダルクは、薬物依存者の自発的回復、成長を目指して10年前に発足した。施設では、自らも薬物依存者だったスタッフと、薬物依存の悩みを持つ人が最低三ヶ月の共同生活をする。入居者は一日三回のミーティングによって互いの体験を話し合い、社会復帰を目指している。

スタッフの一人は「ダルクはどんな薬物依存者でも家族として受け入れ、決して差別したり、軽蔑したりはしない。スタッフの話で一人でも救われれば、その仲間も家族も救われることになる」と話している。

仙台ダルクへの問い合わせ

各種援助の申し出先

〒983 仙台市宮城野区鶴ヶ谷4-16-17

022-251-2656

光ヶ丘スベルマン病院 ホスピス設置へ

光ヶ丘スベルマン病院（理事長・佐藤千敬司教）は7月26日の理事会で同病院にホスピス（緩和ケア病棟）設置を決めた。

この決定は病院がカトリック精神に基づいて設立、運営されていることから、「ホスピス設置を願う会」や多くの市民の期待を受けて行なわれた。病院経営が難しいといわれて久しい時に出されたホスピス設置の決定は各方面から喜ばれている。

病院では理事会後、二十床のホスピスを98年度中に開設するために準備を進めている。あわせて、病院では一般市民、教会を対象にして、「ホスピス基金」への協力を呼びかけている。

寄付金の送り先

◎郵便振替口座 02270712082

「光ヶ丘スベルマン病院

ホスピス基金」

◎銀行振込口座

七十七銀行東仙台支店 普通5265118

「光ヶ丘スベルマン病院

ホスピス基金 代表 佐藤千敬」

青年男子召命錬成会

司祭召命活動では、召命錬成会を9月11日から13日まで盛岡・白百合学園黙想の家で行ない、5人の青年が参加した。

使用済み切手が足りません

日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）では使用済み切手を集めています。切手が不足する事態が深刻です。ご協力ください。

送るとき注意

- ・現在は記念切手、外国切手、通常切手を問わずなんでも集めています。
- ・切手は封筒、葉書から剥さずに切り取るだけです。切手の廻りを5ミリから10ミリ残して切り取ります。
- ・日本切手と外国切手は区分けします。

送り先

169 東京都新宿区西早稲田2-3-18-33
JOCS東京事務局切手部

二 教 区 司 祭 長

△ 台 同 研 修 会

二年毎に開かれている浦和、新潟、仙台三教区の司祭合同研修会が、11月11日から13日まで宮城・遠刈田温泉で開催された。

研修会には61人の司祭が参加し東北学院大学教授・浅見定雄さんの講話を聞いた。

「現代社会における宗教の課題」と題した講話は、統一協会、オウム真理教などが引き起こしている問題の核心が話され、参加者から喜ばれた。